

## 平成30年度 学生海外研修報告書 (担当教員)

鹿児島大学長 殿

授業担当者

所属/職名: 小児外科学分野/教授

氏 名: 家入 里志

授業科目名	小児外科学実習
研修先(国・地域) 滞在地	カナダ トロント
研修期間	平成 30年 5月 11日 ~ 平成 30年 7月 27日
<p>〔研修の成果〕</p> <p>新生児医療の進展が著しい現在でも本邦における新生児壊死性腸炎は依然として致死率の高い疾患である。当科では医局の1つの研究テーマとして以前より新生児壊死性腸炎の基礎研究を実施し、論文発表を行ってきた経緯がある。</p> <p>今回の留学先であるトロントのSick Children Hospitalは小児外科の臨床施設として北米でも有数の医療機関であり、且つ新生児壊死性腸炎の基礎研究分野で継続的に研究報告を行っていることでも知られている。同施設のGeneral and thoracic Surgery分野を率いるAgostino Pierro教授とはこれまでに参加した海外学会を通じて面識があったため研究員の留学派遣を提案したところご快諾を頂けたため今回の大学院生の留学に繋がった。</p> <p>当科における以前の基礎実験では新生児壊死性腸炎モデルを作成することに難渋した経緯がある。留学先施設は実験動物がラットとマウスの違いはあるものの、これまで継続的に壊死性腸炎モデルを作成してきた実績があるためその実際の手技やPitfallを学ぶことで、これまでの当科研究を発展させることが可能であると考え。加えて研究内容に関するディスカッションで有益な助言が得られる意義も大きく、その過程を経て研究者としての国際的な視野や意識の持ち方を身につくことは今後よりグローバル化が進む現在の世相の要求に合致する。</p> <p>鹿児島県には国内でも有数の新生児施設を有する鹿児島市立病院があり、当科医局員も同施設で小児外科医療、新生児医療に従事している。今後基礎研究で得られた知見を基に実臨床のデータを集積するにも適した環境であり、鹿児島地域はもちろんのこと国内への多大な貢献が出来ると思われる。</p> <p>また今後継続的に研究を継続し、定期的に研究員を派遣することで同施設とのコラボレーションや国際的な研究デザインの立案に発展することも期待している。</p>	
<p>〔今後の課題〕</p> <p>当科における新生児壊死性腸炎の基礎研究は現在は他の研究テーマが主として行われていることもあり現在は実験が実施されていない。そのため早期に基礎実験を再開し、派遣施設と同等の実験レベルを実現することが急務と考える。</p> <p>また基礎データを蓄積することで、革新的な治療法の糸口の探り発症予防を目的とした新生児管理を見出すことがこれからの課題と考える。</p>	